

竹生島と周辺地域のかかわり

— 祭祀を中心に —

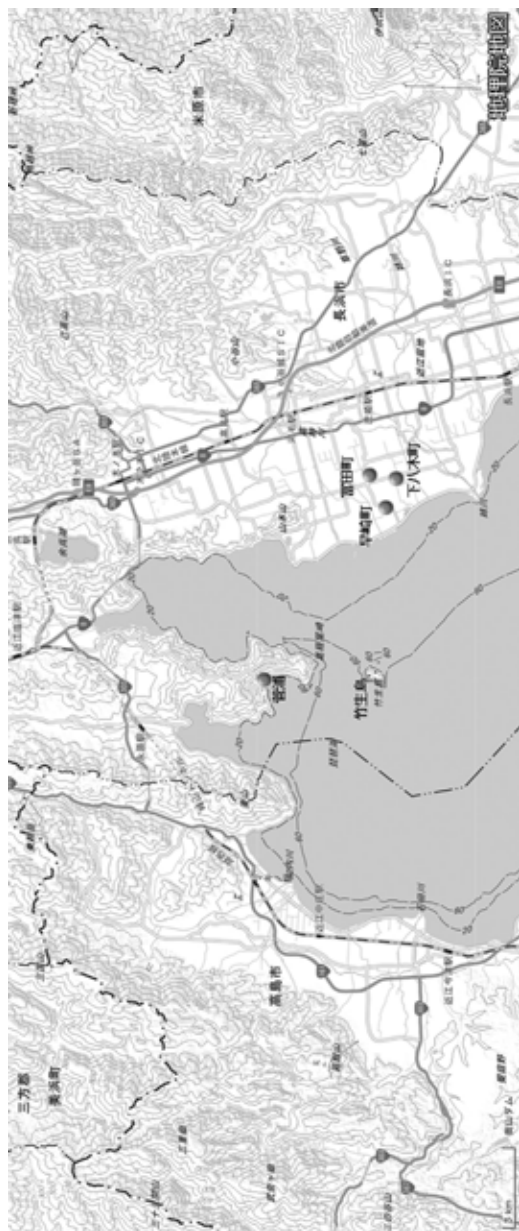
藤井弘章

はじめに

竹生島は琵琶湖北部に浮かぶ小さな島である。平安時代以来、比叡山（天台宗）末寺の修行の地として栄え、中世には四九の塔頭寺院が存在した。近世には寺領は縮小されて三〇〇石となり、九つの塔頭寺院となっていた。近世には新義真言宗になっている。明治時代になると、政府の方針により神仏分離が実行され、宝厳寺と都久夫須麻神社が存在することになった。

竹生島は平安時代から弁財天（弁天）と観音の聖地として知られるようになり、西国三十三所観音霊場のひとつでもあるため、各地から参詣人を集めてきた。近世には大坂・江戸で出開帳などもおこなっている。明治以降に独立した神社の信者は関西以外にも広がっている。このように、竹生島の信仰圏は全国的に広がり、経済的な基盤も広いと思われる。

一方で、竹生島の寺院・神社を日常的に支えてきたのは周辺地域の人々であった。湖北から湖西にかけての湖岸からは竹生島を望むことができる。湖岸から竹生島を見通すことができる地域では、島を身近な存在に感じてきたと思われる。中世から近世に竹生島の領地は湖北に多く、周辺地域は竹生島にとつての経済的な基盤となっていた。こうした地域からは、竹生島の山の管理をしたり、寺院や神社の世話をする人々もいた。また、蓮華会などの



竹生島周辺地図

祭祀を取りまとめる役を担う人々もいた。竹生島と周辺地域のかかわりについては、歴史的変遷や蓮華会などの祭祀についての報告がある。蓮華会の調査報告〔長浜市立長浜城歴史博物館 一九九二、四月祭りを紹介した報告〔滋賀県教育委員会文化財保護課 二〇一二、川崎 二〇一三〕などである。ただし、竹生島の祭祀について民俗的な観点から取り上げたものは少ない。本紀要掲載の藤井論文では竹生島の山林管理にかかわる部分について、周辺地域と島の関係を述べた。本報告では、竹生島および、長浜市早崎町・長浜市西浅井町菅浦において聞き取り調査したことをもとに、竹生島の祭祀を中心にして周辺地域の人々のかかわりについてまとめておく。

2 早崎町と竹生島

早崎・下八木・富田は竹生島の領地であった。江戸時代には、早崎の半分程度が竹生島領であった。現在でも、早崎には島の田んぼが三町三反あったと語られる。シマダ（島田）という。ここで餅米も作っていたという。シマダは下八木・富田にはない。

早崎には、要誓寺の総代、五社神社の総代のほかに、宝厳寺の総代、都久夫須麻神社の総代がいる。早崎のほか、下八木・富田にも宝厳寺と都久夫須麻神社の総代がいる。三か字が蓮華会などのオトリモチ（お世話）をしている。とくに早崎の神役がお手伝いをしている。

宝厳寺の総代以外に、早崎には神役（シンヤク）が四人いる。代々、世襲制であった。総代は任期があるが、神役は任期がない。早崎では農業と漁業を生業にしていたため、神役の仕事に出て行くことができ



写真1 早崎から竹生島を望む（2007年1月、藤井撮影）

た。現在では勤めの仕事をしている人が増えてきたため、自由がきかなくなった。そのため、世襲は崩れてきているところ。

神役は、蓮華会の世話をし、祭りごと一切を仕切る。頭人を探して、トウサシをするまでが一番大変という。

3 菅浦と竹生島

菅浦には寺が四か寺ある。阿弥陀寺の檀家は四〇軒ぐらい、今は三〇軒ぐらいで一番多い。真宗・時宗もある。真言宗の真蔵院は竹生島宝蔵寺の末寺。真蔵院の住職は宝蔵寺の峰さんが兼務している。菅浦では真言宗の檀家は少ない。一五軒。葬式・法事など、峰さんが来てくれる。

戦後、二・三年ぐらい、菅浦から竹生島（宝蔵寺）へ下肥をもらいに行った。菅浦では四人ほど肥取りの株を持っていた。お世話方、肥取り組と呼ばれていた。竹生島（宝蔵寺）の注連縄縫いから肥持ちままでおこなっていた。早崎の人たちは注連縄ないはするが、肥取りはしなかった。

新年の一月四日に島年頭に行く。真蔵院の檀家が行く。連れ立って行く。今は、つづらお荘の船を、寺からお願いして行く。酒二升を持って行く。酒をよばれる。個人で五〇〇〇円程度お供えをする。判を押してある餅をもらう。早崎と一緒にいる。場も一緒。菅浦の人は神社には行かない。



写真2 菅浦から竹生島を望む（2018年5月、藤井撮影）

竹生島と周辺地域のかかわり

田植えが終わるとドロオトシ。五月終わりごろ。ソフオトシという人もいる。日程は組長会で決める。二日ぐらい休む。このときに竹生島に行く。島に行くのは盆が一番多い。ドロオトシのときに行くのはわずか。米・野菜・お茶などを持って行った。

盆の八月一五日には蓮華会を見に行った。弁天さん・観音さん参りをした。大浦からも丸子船を出して行った。ここらは西浅井郡だった。浅井郡の系統が蓮華会を受けていた。菅浦では蓮華会の頭人を五軒ぐらい受けている。

4 島年頭

正月に早崎・菅浦から竹生島へ初穂を持って行く行事がある。島年頭という。早崎は一月四日、菅浦は一月五日におこなっていた。最近では菅浦も早崎と同じ四日におこなうようになってる。

早崎の人たちは昔は「在所行っていた」といわれる。一軒に一人行ったとい、四〇〜五〇人は早崎か



写真3 早崎からの島年頭（2007年1月4日、藤井撮影）



写真4 早崎からの島年頭（2007年1月4日、藤井撮影）

ら行っていたという。「地元の人とかかわりが一番近い」と語られる。昔は女性には行かなかったが、徐々に女性も行くようになった。昔は船も小さく、水が船に入って大変だったが、船も大きくなり、安全になった、ということも影響しているという。米二升を持って行くのが習いであった。包みで米を持って行くが、お金を持っていく人もいる。早崎からは区長以下三役と、組長（早崎は六つの組に分かれている）が出席する。その他、一般の人も参加する。早崎では「島年頭すまな実家へ行かない」、「島年頭すまさんことには嫁の親元へ行くことならん」などといわれ、四日以降に嫁は実家へ帰った。戦後には、早崎からは二〇人ぐらい乗れるボンボン船が出ていた。この船で島年頭に行った。

下八木は米を公民館で寄せて、役員が持って行くだけである。

早崎は宝厳寺と都久夫須麻神社に行く。菅浦は寺だけに行き、神社には行かない。早崎の人たちは、寺にあいさつに行つてから、神社に行く。住職に挨拶するときは扇子を前にして挨拶する。神社も同じ。住職に



写真5 宝厳寺に米を奉納する（2007年1月4日、藤井撮影）



写真6 宝厳寺からいただく餅（2007年1月4日、藤井撮影）

挨拶するときには、その前に「ほり賽銭」をする。丁寧な人は紙に包んで投げる。

島年頭には寺から餅が配られる。餅にはすべて宝印が押してある。小さいほうはオコリオサエといい、流行病にかからないということ、早崎では重宝された。餅は富田・下八木には全戸に配る。早崎は来た人だけに配る。餅の大きさはそれぞれの集落で違った。富田が一番大きく、早崎の餅は小さかった。これは、昔、早崎は低いところにあつたため、よく水につかったが、富田は高いところにあつて、餅米もよくとれたからといわれている。

島年頭では、神役と寺の役員が早崎の人たちをお呼びしている形になるので、神役たちが接待をするようになる。

島年頭のときに、早崎の区長が牛玉箱を持ち帰る。筆者は、平成一九年（二〇〇七）一月四日に早崎の島年頭に同行し、見学させていただいた。調査時の行程は以



写真7 住職にあいさつ（2007年1月4日、藤井撮影）

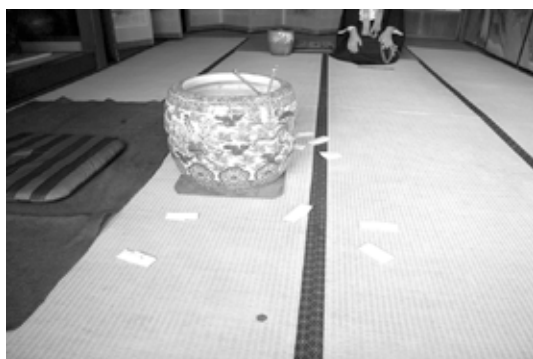


写真8 賽銭（2007年1月4日、藤井撮影）

下のようなものであった。八時過ぎ、生島宮司が運転する都久夫須麻神社の船で早崎を出発。早崎の役員が七人ほど乗船（写真3）。まづ寺の本坊に行き、持参した米を納め（写真5）、餅をいただき（写真6）、住職に挨拶をする（写真7）。その後、弁天堂と神社本殿に参拝。社務所において、持参した米を神社に納め（写真9）、授与品をいただく。社務所で直会（写真10）。その後、観音堂で祈祷し、本坊で直会（写真11）。再び、生島宮司の運転する神社の船で早崎へ戻る。一四時ごろに早崎に着く。

5 蓮華会

歴史 先頭・後頭という二人の頭人が、竹生島から弁財天・御幣・榊などを預かり、再び竹生島に送りかえす行事を中心に展開する。最古の記録は貞元二年（九七七）といわれる。室町時代後期や江戸時代初期に描かれた複数



写真9 都久夫須麻神社に米を奉納する（2007年1月4日、藤井撮影）



写真10 都久夫須麻神社での直会（2007年1月4日、藤井撮影）

の「竹生島祭礼図」が存在する。そこには、飾りたてた多数の船で竹生島へ向かう人々の様子が描かれている。蓮華会は六月一五日におこなわれていたが、明治時代以降、八月一五日になっている。明治時代の神仏分離以降、蓮華会は宝蔵寺の行事となっている。大正六年（一九一七）の『竹生島遊覧』にも、飾りたてた船が出ていたと記されているが、現在ではこのような船は出ていない。本稿では、おもに早崎の神役など、蓮華会の世話をしている人々からうかがった話をもとに、現状の蓮華会の様子を報告しておく。

由緒 雨乞いかけの祭りという。雨が降らないで病気が出て竹生島で雨乞いかけたら雨降った、といういわれがある。

頭人の決定 神役は先頭と後頭の二人の頭人を探す。先頭は何回か受けた家から選ぶ。後頭は初めての家。資産がある家で、由緒があり、信仰心があつて、地域から信頼されている人物を探す。昔は蓮華会奉行がいて、命令していた。受けられない人には罰則があつた。現在でも頭人を選ぶことは名誉なことであり、「浅井郡の長者にトウサシがある」、「（頭人になると）村の長者や」などと語られる。江戸時代に苗字がない人でもそのときだけ名前下に「尉」をつけて武家身分として頭人を勤めた。昔は頭人になると、米一〇〇俵を出したといわれる。最近は大坂などへ出ている人を選ぶことも多い。頭人を探すのが神役の仕事。

一月四日の島年頭の日、竹生島で今年の蓮華会の頭人を決める。候補者の中からくじで頭人を決める。宝蔵寺住職が選ぶ。候補者が一人のときもある。頭人を選ぶと、住職が木の箱に、頭人の名前を墨書する。この箱に、



写真11 宝蔵寺での直会（2007年1月4日、藤井撮影）

「牛玉 竹生島 宝印」と書いたお札を入れ、開けられないように釘を打つ。お札は弁天さんの分身なので、開けてはいけないという。この箱を牛玉箱に入れて、トウサシの日に決定した頭人の家へ持つて行く。牛玉箱は元旦から宝厳寺の観音堂で祈禱したものである。お札を入れた箱は蓮華会が終わっても開けない。床の間の上の方か、蔵の天上などに祀っている。代々持っているといる。

神役が頭人選ばれた人に電話で伝える。伝える口上が決まっている。「平成何年度の竹生島の蓮華会のおみくじにあがられましたので、頭人に選任されました。何日におうかがいいたしますので、よろしくお願いいたします。」という。名前はトウサシが終わるまで神役の家族にも言わない。

島年頭のとくに、早崎の区長が牛玉箱を持ち帰り、一月八日と一〇日のトウサシまで、区長の家でタツパイスル（おまつりする）。この箱には弁天様の分身が入っている。正月に寺で魂を入れてもらう。中に頭人さんの名前が書いてある。

トウサシ（頭差し） 先頭は一月八日。後頭は一月一〇日。頭人に決まった家に牛玉箱を持つて行って、受けてもらう。頭人の家に牛玉箱を納めていただく。牛玉箱を受け取ってもらえると、頭人を受けてもらったということになる。トウサシのときの口上がある。「本日は、竹生島宝厳寺のお使いとして参りました。宝厳寺最大の行事の蓮華会平成何年度の先頭に選択させていただきましたので、牛玉箱をお受けいただきました。」という。内諾してもらっておいでから行くが、家に上げてもらえないで、断られることもある。本人は受ける意思があっても、家族の反対



写真12 牛玉箱（2009年1月8日、藤井撮影）

で断る場合がある。二・三時間粘つてもだめだったこともある。

牛玉箱の中の箱だけ床の間に置いて、その前に洗い米・塩・水を置いてタッパイしてもらおう。トウサシの日は、頭人の家で頭人・僧侶・神役が直会をする。お札を入れた箱は八月一五日まで祀る。牛玉箱は神役が持つて帰る。牛玉箱は、ふだんは早崎の区長の家に置いてある。富田・下八木の箱をあわせて四つある。トウサシの日に、神役が持つてくる。

「蓮華会の頭がさすとナマズを食てもええ」という。

筆者は、平成二〇年（二〇〇八）一月八日に先頭の家で直会をしている際にうかがい、写真を撮影させていただいた。

サカキイレ（榊入れ） 五月から六月の頭人の都合のいい日におこなう。竹生島から弁天さんを頭人の家を持つて行く。

頭人の家に行く前に僧侶・神役はオチツキヤド（落ち着き宿）に入る。これは頭人の親戚の家などである。島からヤドまでは神役が弁天さんを持つて行く。ヤドに弁天さんを仮安置する。僧侶が一服し、着替えをする。そこから、頭人の家まで行列を組んでお練りをする。露払い・お稚児さん・サカキを持った人・御正体・弁天さん・僧侶と続く。御正体は鏡で、観音さんが彫つてある。これが御幣になる。サカキは蓮華会会の会長、御正体は頭人の親戚が持つ。

サカキはここで用意する。島から持つてこない。法要のときには、住職がシキビの葉を持つて拝むが、供えるのはサカキだけ。サカキは神さんのものだけど、蓮華会では使う。法要のときだけサカキを使う。ふだん、タッパイスルときには色花。

頭人の家に着くと、床の間に弁天さんを祀り、法要をする。僧侶が三人ほど来る。御正体も床の間に置いて、八

月一五日までタツパイしてもらう。トウサシの日から祀っているお札の箱と一緒に床の間で祀る。八月一五日まで祀って、蓮華会に竹生島に返す。毎日、オブクサンとお水を弁天さんにあげる。オブクサンとはご飯のこと。仏壇にあげるのもオブクサンという。

かつては、頭人の家のお嫁さんに似た弁天さんを仏師に作らせて蓮華会のときに竹生島へ奉納したという。今は新たに刻んで奉納する人はめつたにいない。竹生島に何体もあるので、そのうちの一体をサカキイレの日に頭人の家へ持つてくる。ほとんどの家は、弁天を祀るお堂や石碑を記念に建てる。何回も頭人をやった家だと、お堂や石碑が二つも三つもある家がある。頭を務めたことのある家をレンゲヤサンと呼ぶ。

頭人には奉納の品を書いた目録を渡す。餅米など、項目は書いてあるが、今はだいたいお金。上納金として、これだけはお願いたないと、神役から説明する。神役は羽織袴で行った。今はダブルのスーツで行く。扇子、数珠、賽銭を持つて行く。住職には傘をさす。トウケへ着くのは九時。一〇時ごろから法要。一一時過ぎに法要終了。一二時半ぐらいから直会。親戚などを招待して、直会をする。昔は家に招いていたが、今はホテルなどでしている。大阪の人の場合は、大阪でする場合もあるが、こちらに家を持つている場合も多いので、こちらのほうですることもある。五〇人や一〇〇人以上のこともある。商売をしている家ときは、歌手や太鼓、祇園の舞子を呼んできたこともある。商売の宣伝にもなる。結婚式並みの披露をする。

蓮華会 八月一五日。サカキイレの日から頭人の家で祀っていた弁天さんを竹生島へ返す。先頭の一行が二〇人、後頭の一行が二〇人、合計四〇人が参加する。頭人の一行は、長浜港九時ごろ出港の船で竹生島に渡る。頭人が大阪の人であっても長浜港から出ることが多い。一〇時ごろ、本坊からお練りをする。

蓮華会の日は、寺と神役が世話をする。神役は一四・一五・一六日と島へ行く。一四日は準備、一五日がホンビ(本日)、一六日は後始末。港から弁天堂まで頭人たちを案内するお稚児さんは早崎から出る。子どもは一四日から

行つて稽古をしたが、今は当日だけ行く。昭和二年生まれの話者は小学校一年のときに竹生島へ泊まったという。家から出て一人で泊まるのは初めてであったといい、「お稚児さんせんなんさかい、日焼けすんなよ」と言われたという。日焼けするから泳いではいけないと言われる。することがないので、島の山へ登つて行つた。男の子ばかり四人行つた。今は早崎だけでは子どもが足りないのので、下八木などから借りてきている。今はお稚児さんは露払いだけをしている。

一〇時半ごろから一時間ほどお勤めをする。一〇人ぐらい僧侶が来て、弁天堂で拝む。内陣に入り、先頭は東（向かつて右）、後頭は西（左）に座る。一二時ごろに終わり、直会をする。ヒキサカズキといつて、ご飯茶わんみたいな椀で酒を飲んで帰る。最近午後二時半ぐらいの船で帰ることが多い。

一七日には頭人の家に神役が礼に行く。頭文（トウブミ）を持って行く。お祭ごとをしていたきましたという書類。江戸時代とは書き方は違う。頭文は額に入れて飾つてある家が多い。これで蓮華会は終りとなる。神役は来年の頭人を探さないといけなくなる。

6 寅祭り

早崎では四月の寅の日に寅祭りをする。寅の日が二回あるときは、あとの寅におこなう。三回あるときは、中の寅の日にする。昔は竹生島明神の神輿が早崎の入り口の石鳥居まで来た。このとき、早崎のオコナイ組（宮本組・常盤組・松ヶ枝組・岡本組）から五名ずつの長老が出て奉迎する風



写真13 一の鳥居（2005年8月、藤井撮影）

習があった〔井上 一九六〇〕。

現在では区長が取り仕切るが、神役も行く。宝蔵寺の方丈さんに早崎まで来てもらい、一の鳥居から島を向いてお勤めをする。御正体やサカキも持つてくる。そのあと、堂ヶ浜・中の宮・五社神社を回って拝む。早崎の吉川尚宏さんの家の石垣から竹生島を遥拝する。五社神社には弁天も祀っている。堂ヶ浜には小さなお堂があった。湖岸道路がなかったころには、石垣から拝んだ。昔、早崎は堂ヶ浜にあった。水浸しになって、今の位置に移住した。そこから島に向って御祈禱をする。祭りが終わると、区長の家に宝蔵寺住職・竹生島神社宮司・総代・神役・区の三役を招待して直会をする。

7 四月祭り

〔川崎 二〇一三〕によると、富田では四月に竹生島の弁天を祀ってきた。「島祭り」、「四月祭り」と呼んでいる。富田のほか、下八木でも祀る。早崎では寅祭りと呼んでいる。富田での「頭家」の決め方は、富田生まれの、富田在住の長男のみに資格があり、南北富田の年齢順ということになっている。下八木では結婚前の長男、早崎では区長が「頭受け」する。安永五年（一七七六）から明治一六年（一八八三）までの四月祭りの頭役の記録を綴った「四月祭頭役記録」〔『宝蔵寺文書』〕によると、富田村の頭役は毎年であるが、下八木村の頭役は隔年となっている。宝暦七年（一七五七）の「年中行事口授指南集」には、四月祭りが定例化していることが記されており、それ以前からおこな



写真14 四月祭りの箱（2009年1月8日、藤井撮影）

われていたことが分かる。

以下は、早崎での聞き取り内容である。なお、筆者は富田・下八木では調査できなかった。

富田・下八木で弁天さんを祀る。蓮華会とほぼ同じ内容で略式にしている。神役は一月一日に後頭と富田へ行く。下八木には一月二日に行く。今は土日に合わせて行くことが多い。一月一日前後に行く。富田は順番に回っている。下八木は、未婚の長男だけで祀っている。四月に神役が富田・下八木の頭人の家に行き、サカキイレをする。田んぼが始まる前に行った。弁天さんを祀ってもらい、八月一日に竹生島に返しに行く。下八木・富田もサカキイレのあとに直会をする。家や旅館でしている。親戚ぐらいしか呼ばない。早崎は弁天さんを預かる行事はない。早崎では寅祭りをする。

8 雨乞い

早崎在住の大正一二年生まれの話者が若いころ、竹生島の弁天さんをお借りしてきて、在所の者が寄って、公民館の床の間に置いて雨乞いをしたことがあったという。たいがい雨をもらったという。島の管長は夜も泊まったという。

〈参考文献〉

- 生島礼智 一九〇八 『竹生島案内記』 私家版
井上頼寿 一九六〇 『近江祭礼風土記』 滋賀県神社庁
『角川日本地名大辞典』 編纂委員会編 一九七九 『角川日本地名大辞典 二五 滋賀県』 角川書店
川崎太原 二〇一三 『富田今昔物語 — 近江湖北の一農村 江州浅井郡富田村の記録 —』 サンライズ出版

河邨吉三 一九〇〇 『竹生島要覽』 私家版

佐々木孝正 一九六八 「近世における竹生島の開帳について」『印度学仏教学研究』 一六一―二

佐々木孝正 一九七五 「竹生島における神仏分離について」『大谷学報』 五五―二

澤実英 一九七五 『竹生島誌』 宝厳寺事務所

滋賀県教育委員会編 一九七九 『名勝史跡 竹生島保存管理計画』 滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会文化財保護課編 二〇一二 『滋賀県の民俗 湖北』 滋賀県教育委員会

陳舜臣・峰覚海 一九八〇 『古寺巡礼近江 三 竹生島宝厳寺』 淡交社

長浜市立長浜城歴史博物館編 一九九二 『竹生島宝厳寺』 長浜市立長浜城歴史博物館

長浜市長浜城歴史博物館編 二〇〇八 『竹生島弁才天信仰と名宝』 長浜市長浜城歴史博物館

長浜市長浜城歴史博物館編 二〇一一 『戦国武将の竹生島信仰』 竹生島宝厳寺

馬場海寿編 一九一〇 『竹生島遊覧』 宝厳寺事務所

早崎観縁 一九九三 『早崎のムラの昔』 早崎区

(付記)

本稿にもとになる調査は、平成一六年(二〇〇四)以降に亀田佳代子氏・牧野厚史氏らとともにおこなった、カワウに関する滋賀県立琵琶湖博物館共同研究、科研萌芽研究、および平成二〇(二〇〇八)～二一年(二〇〇九)に実施した近畿大学文芸学部民俗学実習である。

話者…生島厳雄氏(都久夫須麻神社宮司)・河崎義隆氏・倉橋義廣氏・中川善一氏・萩崎富美子氏・早崎得雄氏・松井利文氏・松岡国雄氏・松岡タカエ氏・峰覚雄氏(宝厳寺住職)・森素子氏・山下悟良氏・吉川外紀男氏

現地ではこのほかにも多くの方々にお世話になった。お世話になったすべての方に感謝したい。